

乳幼児期のふり遊びにおける発達的变化

伴 碧¹・内山 伊知郎²(¹同志社大学心理学研究科／日本学術振興会・²同志社大学心理学部)

目的 幼児期のごっこ遊びは、仲間とのコミュニケーション技能の発達、社会的認知能力の発達、現実生活における願望の充足や、役割取得能力や他者の意図理解、相手の気持ちを推察する能力との関連など（高橋，1996，杉本，2004），様々なメリットが挙げられる。しかし，ごっこ遊び以前に，大人とのふり遊びは18ヵ月から始まることが分っているものの，その後の発達的变化に関する実証的研究は少ない。子ども同士で遊びを形成するごっこ遊び（group pretend play）とは異なり，母子など大人と子どもで行うのがふり遊びである。初期のふり遊びで用いられる象徴能力は，周囲の物や人への働きかけや，相互作用によって発達し（Garvey, 1977 高橋訳 1980），さらに，大人からの働きかけによって可能となることがわかっている（麻生，1996）。そこで，本研究では18，24，30ヵ月児を対象に，実験室という統制された状況下における母子のふり遊び場面での，乳幼児のふり遊びの発達的变化について検討を行った。

方法 実験参加者 18ヵ月の乳幼児12名（男児6名，女児6名），24ヵ月の乳幼児12名（男児7名，女児5名）30ヵ月の乳幼児8名（男児3名，女児5名）とその母親を対象とした。

手続き 課題はLillard & Witherington (2004)を参考に，テーブルの上に，空のピッチャー，コップ，皿，台拭きを配置し，母親に，3分間ふり遊びを乳幼児と行う教示し，実験者は，実験参加者からは見えない位置に移動し，3分間行動を観察した。

結果・考察 指標 ふり遊び行動の指標は，Lillard & Witherington (2004)の行動指標を参考に，乳幼児の「食べるふり」，「飲むふり」，「注ぐふり」，「拭くふり」，「母親を注視」，「アイコンタクト」，「笑顔」の7指標を指標とした。また，「ふり合計」として「食べるふり」，「飲むふり」，「注ぐふり」，「拭くふり」を合計したものを加え，指標ごとに，3分間で観察された秒数を算出した。18ヵ月児，24ヵ月児，30ヵ月児それぞれが，3分間に示したふり遊び行動の平均値（秒）をTable1に示した。

月齢によってふり遊び行動が変化するかを検討するために，一要因の分散分析を行った。結果，「食べるふり」($F(2, 29) = 4.56, p < .05$)，「飲むふり」($F(2, 29) = 6.41, p < .01$)，「拭くふり」($F(2, 29) = 4.20, p < .05$)，「ふり合計」($F(2, 29) = 9.63, p < .001$)，「笑顔」($F(2, 29) = 7.63, p < .01$)において，月齢の効果は有意であった。Bonferroniによる多重比較を行った結果，「食べるふり」は18ヵ月児よりも24ヵ月児のほうが長く行動を示しており($p < .05$)，「飲むふり」，「ふりの合計」は，18ヵ月児よりも24ヵ月児，30ヵ月児のほうが長く行動を示していた($p < .05$)。また，「拭くふり」では，18ヵ月児よりも30ヵ月児のほうが長く行動を示していた($p < .05$)。さらに，ふり遊びの理解指標である「笑顔」(Lillard & Witherington, 2004)は，18ヵ月児よりも24ヵ月児のほうが長く表出していた($p < .05$)。以上の結果より，統制された条件下において，18ヵ月児よりも24ヵ月以上の月齢でふりの理解指標である「笑顔」が長く表出されたことや，ふり行動が長く示されたことから，乳幼児期のふり遊びは24ヵ月という月齢までに確立することが示唆された。

Table 1 ふり遊び行動の月齢別平均値

	18ヵ月	24ヵ月	30ヵ月
食べるふり	1.33 (2.02)	5.63 (5.16)	4.00 (1.72)
飲むふり	3.47 (3.15)	8.03 (3.92)	8.51 (3.90)
注ぐふり	7.26 (10.86)	12.80 (7.60)	13.55 (6.17)
拭くふり	1.46 (3.41)	6.48 (6.66)	8.09 (6.14)
ふり合計	13.51 (10.70)	32.94 (15.19)	34.15 (9.93)
母親を注視	3.72 (1.55)	5.11 (3.56)	5.12 (3.71)
アイコンタクト	8.68 (4.30)	14.77 (9.72)	11.88 (8.23)
笑顔	4.45 (4.27)	13.40 (9.92)	20.10 (9.72)

単位（秒），（）内はSDを示す